

---

# 通りすがりの魔法使い

//ZERO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

通りすがりの魔法使い

### 【Nコード】

N4050G

### 【作者名】

/ / ZERO

### 【あらすじ】

放浪の旅を続ける男がたどり着いたのは死んだ村だった。そこに一人死にかけて少女が一人。

一話 黒いはちみつと白いワッフル (前書き)

世界はいつも不公平

## 一話 黒いはちみつと白いワッフル

「ようこそ、そしてさようなら」

質素なワンピースを着た小柄な少女が言った。言われたフードの付いた黒いローブを着た男は困っていた。

「歩き疲れたんだ。少し休むところはないかな」

「ない」

間髪入れずに少女は言った。言われた男は困っていた。

「君以外に他に人はいないのかい。見たところ村のようだけど」

「死んだわ」

特に感情を込めずに素早く答えた。そう言った少女はとてもやせ細っていて、顔色が良くない。生きているのか疑問に思えるほどに肌が白く、ところどころその白い肌が泥で汚れている。瞳を見てもと焦点をはっきりと結んでいるようには見えず、肩まで寝ていたのが乱れていた。寝癖がはつきりと付いていて先ほどまで寝ていたのがわかる。少女の背後に見える木々に囲まれた村はまだ昼だというのに静まり返っていた。それらを総合して男が得たこの村に起こっている状況。

「病気……？ 疫病か」

「そう、だからこの村にしていると感染する。だから戻って」

雲ひとつない空はとても青く、そこにある眩しい光が男と少女を照らす。

「まあ、大丈夫」

何が？ と言いたげな顔をした少女に男は微笑んでこう言った。

「そんなんじゃないからさ」

「変な男……」

少女は呟いた。銀髪の男はオーズと名乗った。命が危険にさらされる原因不明で治療法不明の疫病を前に死なないと言い、死人が住まう村に足を踏み入れた。

（オーズとは確か、激情の神の名前だったはず）

しかし、名前とは反して全く性格は穏やかで行動は優しいものだ。村に入ってオーズは、少女が病に苦しみ行えなかった村人の供養を始めた。一人一人丁寧に土へ還し、墓石とまではいかないが慰めの言葉を掘った形の歪んだ大きな石を建てた。少女はその姿を少女の家の一室の窓から眺めていた。村中を漂っていた異臭はいつの間にか途絶えて村が綺麗になったような気がした。オーズが少女の家に向かつて歩いてくる。それを確認した少女は窓から離れ、ベッドに横になる。

「終わったよ」

オーズがそう言いながら少女のいる部屋にやってきた。体中が泥まみれで、顔が軽く赤みを帯び呼吸を少し乱していた。

感染してしまったのか、と少女は思ったが体が軽々動いている様子から、ただ疲れているだけということがわかった。

（本当に感染しないのだろうか）

その懸念はいつまでたっても晴れることはないが、とにかく忠告を受けずにこの男が死んでしまっただけでは何かと目覚めが悪い。少女はそのことをずっと考えていた。

「本当に大丈夫なの？ 死んでも知らないわ」

「ああ、気にしないでくれ」

「……気にしていない」

「そつだ、名前を教えて。呼ぶ時に呼べない」

「私はレク。でもすぐ忘れて」

オーズは後半を聞き流しそのまま家の中を歩き回り始めた。レクの住まう家は木造の小さな家だ。リビングと部屋が二つ、それと生活ができる最小限の家具と道具しか置いていない。壁や床が傷ついておらず、古びている様子から大事に住まわれていることが見て取

れる。埃がたまっているという点を除けば。

「ちよつと、何を」

オーズが手当たり次第に物を探り始めた。

「何を、って掃除しようかなってね」

箒を探し当てると手際良く埃を集めていった。足跡を残すほどたまっていた埃は箒にどんどん絡まっていく。

「汚いな、結構放置したね」

「うるさい、看病して感染して、そんな暇なかったの。それより埃を立てないで」

「ん、もちろんだ」

そう返事したものの手の動きは全く変わっていないかった。埃を立てるような掃き方をするオーズに一喝しようとレク息を大きく吸い込む、その時に見た。埃が中に舞わず、その上散らばらずに扉を通って外に流れ出ていくのを。さらに、箒で掃けない汚れを見つけたら、オーズは手に水球を作りその汚れを湿らせて近くに置いてあった布で拭き取るという怪奇な行動までする。

「あなた、魔法使い？」

「まあね。……風の力は異端の力だけだ」

異端の力。簡単にいえば、超能力のような生まれつきつく力。魔法とは、知識と才能がなせる技。その力は戦いや強奪に使う者が多く存在し、忌み嫌われていて恐怖すべき対象として知れ渡っている。ただ、レクはそれをなんとも思わなかった。病による思考力の低下が危機感を薄くしたというのも原因の一つだが、何より掃除に世界中の人々から忌み嫌われた力を使うオーズが可笑しくすら感じたのだ。

「ふふ、そんなことに力を使うなんて」

「結構便利だからね……」

オーズは呆気にとられた顔をしてレクを見つめていた。何を、とレクが思った瞬間。

「いや、あのな、嫌われると思って、でも反応が違うから驚いてさ。

怖くないのか」

「怖くないし、逆に可笑しい。ほかに何ができるの？」

「料理をするときに火が出せる」

笑顔で言うオーズはその一言でレクをさらなる笑いへ導いた。先ほどまで何か思いつめたように暗かったレクの表情は一転し、濁りのないきれいな笑顔をオーズに見せた。

オーズはレクの家族が住んでいた小さな家をすぐに掃除し終えてしまった。その頃にはもうすでに陽は暮れようとしていた。夕闇に染まる村はさらに静寂となり、殺伐とした空気になった。村を囲む木々からは鋭く尖った気配が染み出ている。

掃除を終えてから二人は沈黙していたが、オーズの腹の音がその沈黙を破った。オーズは少し赤面し、少女が遅れて笑い始めた。

「笑うなよ、それより腹が減ったな」

「三日ほど食べてないから何とも思わないの」

「それはだめだな。人生三年損したぞ」

「三年つてそんなに損するの」

「するものなんだよ」

和やかな空気が場を包んで、二人の顔から自然と笑みがこぼれる。「何が食べたい？ どうせ村には誰もいないしどっかから持ってきて何か作ってやる」

「……泥棒。なんて言う人もいないか」

誰もいない事実を再確認してしまい少し悲しくなったが、頭からそのことを振り払いレクは少し考えた。人生の残り少ない食事に何を食べたいか。今は、食事と言う一日の生命活動の一つでさえ行うことができなくなるほど体が弱り、数日も食べていないレクの体は食べるという行為に対してだった。今ではなく、もっと前に好きだった食べ物と思い浮かべようとレクは試みる。だいたいこの男はどれほど料理ができるのだろう、と言う疑問もあったがそこは深く考えないことにする。そして少しの間で行った自問自答の結果。

「甘いもの」

「まかせな」

簡単な、たった一つの頼みがオーズに注文された。

レクはオーズが料理した甘い食べ物を見た。網模様の食べ物に、色が黒に近い濃いハチミツをかけた食べ物だ。

「ワツフル。知らない？」

「わっふる？ 知らないわ」

どうぞ、とワツフルが二つ乗った皿をレクに差し出した。レクはその一つを手につかみ、少しかじってその味を堪能した。ハチミツをかけたワツフルはとても甘くて、外はカリっとしていて中身はふんわりしている、とても歯触りのよいものだ。レクはそれを夢中で食べ、二つをすぐに平らげてしまいオーズの皿に乗っている一つを取って食べてしまった。

オーズは情けない声を出して哀しい目をした。それから眼の前から消えたワツフルの残像を何度も何度も頭の中で再生した。

「おいしい。これなら確かに三年損したって言われてもしょうがないわね」

「これ食ったら寝ろよ。たく」

少し怒気がこもっている声で言った。

(食べ物くらいで)

と思ったが食べ物の恨みは恐ろしいと、村人の誰かが言っていたことを思い出して少し身震いをした。

「今日はなんだか調子がいいの。もう少し起きている」

オーズは考えた。レクを手助けしたいと思っている。ただそれは本当にいいのか悪いのか。気持ちを知らぬまま生かしておいても意味がない。オーズはレクの気持ちを知りたかった。何かすることはないかと考える。窓に目を向ける。星

「……じゃあ、どうせ暇なのだろうから星を見ないか」

誘うにはあまりにも感情を込めず言った。あまりにも唐突に誘ってしまい断られてしまうと思ったオーズだったがそうでもなか

つたらしく、曖昧な返事を返して承諾してくれた。

二人は屋根裏へ移動し、そこから梯子を使い屋根に上った。雲ひとつないほど晴れ渡っていたおかげか、星が漆黒の空一面をまぶしくくらいに輝いていた。小さいものが集まって輝く姿はとても美しい。たが逆に星がありすぎて、ただ一つだけの星へ目が向いてしまつと、そこから目がそらせなくなってしまつほどその一つが儂く感じてしまう。

「寒くないか」

「……」

「……レク？」

レクもその一人で、星を見たことにより自分もまた儂い存在なのだろうと感じてしまった。

（どうせ死ぬ。 いまさらどんな思いをしようつと、どんなに考えようと、どんなに足掻こうとしても私の力では無理）

その小さい体から熱が引いた。

（夢……私の夢はどうなるの……そう、潰えるのね）

「寒くないかっ」

その声でレクは視線をひとつの星から離し、オーズの姿を見る。

それから少し間を開けて質問に答えないといけないと焦り、少し慌てふためく。

「えつと、大丈夫」

一拍間を開けて。

「むしろ、暖かい……？」

自分の身に何が起きているのかとレクは身の回りを見てみる。温かい風がレクを撫で、茶色の肩まであるまつすぐな髪が風に揺られ、スカートの裾が風と踊っていた。瞬時に魔法の力が働いているのだと理解する。

レクはもう一度オーズの顔を見て、はっきりとした口調で言う。

「大丈夫、ありがとう」

「誘ったのは俺だしな」

嗚呼、温かい。

体を感じる熱のことではなく、心が満たされる温かさ。

レクの村で疫病が発生したと同時に何もかもが狂い始めた。それまで楽しく過ごせていた日々が急に一変し、地獄に変わった。その時からレクの中で何かが壊れ、何かを忘れてしまった。

まだ親に甘えなくなる年頃でありながら親を亡くし、誰かに頼りたいの頼る相手がいない心細さは体だけでなく心もやられていた。そんな時に現れた男。

心を通して伝わる優しさに目の行き場をなくし星を見上げた。肩の荷が下りて、下りた荷物の分だけ心が淋しくなった。寂しくなった。再び一つの星に囚われることはなかったが、レクは瞳に涙がたまっていくのがわかり、思った。

こんなにも孤独を感じなきゃいけないなら星なんか見なきゃよかった、と。思ったその瞬間レクに軽い衝撃が加わりバランスを崩す。倒れていく体は温かい何かにぶつかり止まる。その上からふわ、とやわらかい生地でできた黒いローブがレクを包み、人のぬくもりがその体に伝わる。呆気にとられたレクは顔が下を向いたまま動けなくなった。

「え……？」

レクは一人用の黒いローブにオーズとともにくるまってもまだ余裕があるほど小さい体の持主だった。身も心もまだ幼かった。会話が途絶えたと思うと星を見上げたまま瞳から光が消えた。その表情を見ているとどうしてもオーズは何かしてやりたくなった。この行動が良かれ悪しかれ。

「寂しそうな顔するなよ。とりあえず俺がいるから」

オーズの静かな微笑み。

（私は、甘えていいのだろうか。でもここで甘えたら全てを捨てて死のうと思った私の決意が揺らぐ。でも……今くらい温かいぬくもりを感じたって）

決意。簡単にいえば死と向き合う覚悟を決めたというもの。食べ  
ることも考えることもオーズが来るまで行わなかった。生への執念  
が醜く死をより恐ろしいものへと変えるのを、死んでいく村人たち  
を見ることで学んでしまったから。

旅をしている割にあまり筋肉の付いていない細身の男だとい  
うことが感覚で分かった。そして、レクは急に襲ってきた倦怠感と眠  
気に体が重くなるのを感じた。ぼんやりとしてきた思考の中でその日  
最後の言葉を言う。

「魔法で治せたりする？」

「残念だが」

「無理なのよね」

レクはそう言うとおズに微笑みかけてから瞳を閉じ、そのまま意  
識を手放した。

魔法使いでもさらに珍しい傷を治せる魔法使い。そんな珍しい魔法  
使いでも外傷は癒せても身体の内部に直接及ぶものは治せない。レ  
クは知っていて聞いた。これ以上余計な希望を持たないように。助  
けるかどうかなどとオーズは言える立場になく、実のところ解決策  
がないのだ。

「……寝ちゃったか」

病人とは思えないほど規則正しく静かな寝息を聞きながら、オー  
ズはそのまま動かさず空を見上げていた。右手を動かさず、常に風を生  
みながら暖かくすることを忘れてはいない。視線は漆黒の空へ向け  
られているがその目は何も写していない。目ではなく頭。オーズは  
そのままレクを抱えたまま横になって思考を続けた。レクは魔法で  
治療することができないということを知っていた。オーズもまた、  
傷を治す方法は知っていても病を治す方法は死ならなかった。

「魔法に不可能はあるか、ないか」

表情は空と同じ、漆黒のように何も感じられないものだった。

「ん……暖かい……？」

なんで、と思った。レクが病気にかかってから朝起きると必ず冷たい布団が出迎え、吐き気、頭痛、眩暈の三拍子ならぬ四拍子が気分を悪くしていた。レクは不思議に思っただけで目の前にいる原因を見た。高くなっている陽の光がレクの目を刺激する。

「……え？」

何で目の前にいるの。何でまだ外にいるの。いつもと違う状況が緊迫した空気を作り出し緊張がレクの頭を支配する。

レクは自分の置かれていた状況を判断すべく、雲のかかったようにはつきりしない頭を最大限に働かせる。温かいと感じた原因は何。それはオーズに体を包まれるような感じで抱かれたまま横になっただけで、その上黒いローブが二人を包んで温風が途絶えていないからでも、なんでこんな状況になっている。

「ん、起きたか」

オーズが目覚めたようにレクは感じた。だがすぐにそれは間違いだと思いつく。温風は魔法によって作られ、それを行使する人が意識して使わなければ止むことはない。

「まさか、一晩中起きていたの？」

「んん、考え事していたら朝になっちゃった」

この男は、馬鹿だ。

「なんでベッドに連れて行かないの。そうすればオーズだって」

レクに一発のデコピンが放たれる。おでこを軽く指で弾かれたのだ。レクは、痛みはあまりないデコピンに思わず小さく声をあげて反応しオーズを睨む。オーズは少し照れた顔をして、それから困ったように口を開いた。

「よく眠れたかい」

ただ一言だけ、レクにそう言った。レクはそのまま肩を震わせ下を向いた。何を思っただけで肩を震わせているのかオーズには分からなかった。

気づけばもうすでに陽が落ちようとしていた。病気にかかってから

よく眠れていなかったのかレクが起きたのは昼ごろで、馬鹿な男ことオーズは昼までレクを天井で温めていたことになる。家に入ると昼食を食べた。二人の食べた昼食は、昨晚あまった材料でワッフルを作り、どこから取ってきたか分からない野菜と卵を二枚のワッフルでサンドして食べた。

オーズが語るにはパンと似た感じだから美味しいという。レクはそれ食べてみておいしいと感じたもののやはりパンと同一とは思えなく、サンドして食べるならやはりパンのほうがいい。とその旨をオーズに伝えたが返事は意外なものが返ってきた。

「パンはまだ美味しく作れない」

ワッフルと似た感じと言っておきながらその似ているパンを作れないオーズにレクは声を出して笑った。

「なんだよ、そんなに笑うことないだろ」

「ごめんなさい」

無垢な瞳で、純粹に笑うレク。それに対して起こる気になれないオーズはただふてくされるしかなかった。レクの笑いがやむと突然口を開いた。

「私の村はね、明るい村だった」

天気が急に変わり、降り注いでいた陽は急に雲にさえぎられ、部屋の中が暗くなる。二人の表情が真顔になった。レクの声のトーンは確実に下がっていて、さっきまで明るい声を出して笑っていたとは思えないほど言葉に重みがあり、一言が何も無い村に染みるように響いた。

「村は月に一度祭りをするの。隣町からも大勢人が来てたくさんおいしい食べ物が売り出されて、大きな火を囲んでみんなで躍るの。オーズ半分口をあけたが、声にせずそのまま口を閉じた。聞いたことが聞けそう。それに水を差すわけにはいかなかった。

「その時よ、私のお母さんが急に倒れたの。そこからあつという間だった」

レクは自分の体を抱きしめるように腕を交差させ、足で毛布を手

繰り返せるとそれで身を包んだ。布団越しからでも震えているのがわかるほどレクは動揺し始めていた。

言いたくないのなら言わなくていい、そう言うこともできたがそうなっても自発的に言い始めたのは話を聞いてほしいから。オーズはそう解釈し、苦しく話すレクを見守った。

「お母さんを看病している時にあの強くて優しいお父さんが倒れ、村長が倒れ、村長を診た隣の医者も倒れ、村の人たちがどんどん消えていく」

声を絞り出すようにしていたレクの声が泣き声になるとともに雨が降り始め、次第に豪雨になっていく。

「どうして、かな。私達何も、何も悪いことはしてないのに、ひっ、なんで……かなあ」

「もういい」

「私も世界を、見たい、夢を叶えたい。それがっ、叶わないせなら私を殺してよっ！」

オーズは動かない。決して殺すことにはためらいがあるわけではない。いつまでも手を出さないオーズに何を感じたのか、怒りをむき出しにしてオーズを睨めつける。表情の変わらないオーズを力の入らない両手で何度もたたたく。

「なんで、……なんで？」

最後は消えるような声だった。その瞬間、外で雨が降り始め雷鳴が轟いてオーズがレクの手を握る。レクが布団からはっとしたように顔を出した。顔は感情が高まり赤くなり、涙や悔しさで噛んで切れた唇から流れる血と汗がレクの顔を埋め尽くすように流れていた。

「なんで？ そんなの、誰にだってわかるか」

ザア、と雨の音だけが部屋に木霊してレクはオーズの胸で声を立てずに泣いた。オーズはレクを見ていただけで何もしなかった。外は嵐のように雨やまだ青い葉が狂い踊っていた。

オーズは悩んでいた。このままレクを思うままに泣かせるのがいいのか押し返して現実を見せるのか、それとも優しい言葉で包んで

しまうのか。

このまま泣かせれば今日また耐えたところで明日は苦しい死が待っているだけ。

押し返せば気持ちのやり場を失ったレクは自爆してしまっただろう。抱きしめるといふ行為はどうだ。レクは確かに満足に泣けるかもしれないが、それだけで救われはしない。この状況でオーズがレクを抱きしめれば、レクはどう感じるだろう。結局は何もできないのだ。行動を起こさなければ変化はない。これ以上気持ちを揺さぶるといふ行為自体よくないのがオーズにはわかった。オーズは何もしないのではなく何もできない。そしてレクを救うことができない。しかし、聞きたいことは聞けた。

(あとは……自分次第)

何十分泣いていたか、結局オーズはその様子を見ているだけだった。暗くなった部屋が静かになるのは雨が降り止んだ時だった。

「……ごめんなさい、出て行って」

「わかった」

オーズはレクの部屋を出た。

その晩、レクは考えた。私の諦めることのできない夢を抱きながら死ぬ。死ぬ時にそれ以上抱くものはいらない。

「オーズ、消えて」

突然のひとこと。オーズは驚きを隠せずたじろいでしまった。

「汚い魔法使い、村から出てって」

オーズは気が狂ったのかと思ったが、瞳を見てそうではないことを悟る。意識ははっきりとして、オーズを見据えるその眼光はとも鋭かった。昨日の一件がレクを変えてしまったのかと思ったがそうでもないということは安易に考えられた。

「何を言って」

「出て行け。私に構うな」

「なん」

「異端の化け物、はやくどこかへ行け！」

その一言にオーズは強く反応を示した。突然オーズの目の色が変わりレクを睨みつける。

「何、だと……」

静かな怒りは次第にオーズの体を支配する。突然空気が変わったかと思うと重い威圧感がレクを襲い突然それまで良かった病気の症状があらわれ、目の前がゆがむ。突然の痛みを失いそうになるが何とか耐えて、平気な振りを続け自分の力を振り絞る。

「化け物と言った。魔法使いで異端者なんて人じゃない」

はたから見れば威厳のある勇氣ある発言だろうが、調子が良かったとはいえ数日で死に至る病を体に宿し平気なわけはなく、威圧感により体調を崩されているレクは今にも倒れてしまいそうだった。

「出てつてやるよ、今すぐに」

一瞬、すべての空気が停止した。レクはそれを敏感に感じ取り、呼吸ができなくなった。それに構わずオーズは村を入ってきたときに持っていた荷物を集めると乱暴に扉を開け、乱暴に閉めた。停止した空気が再び時を刻み始め、ようやく息ができるようになった。

朝だというのに、陽の光は一切差し込まず淀んだ空気がレクを一層悲しくさせた。

「……ごめんなさい」

自分が死ぬ時に悔いを残せば残すほど、死にたくないと思う思いがあればある程これから来る死が、辛く、苦しく、哀しくなっていく。自分の死ぬ見苦しい姿を人に見せたくない。レクは昨晚そう考えた。ならそうならないためにどうすればいい。

追い出せばいい。そうすれば死を目の前にしてもあきらめがつく。後悔はしても潔く死ねる。

レクは既に後悔していた。たった二日。たった二日でレクの捨て去っていた心を救いあげたオーズの存在は大きくなっていった。夢を見せてくれ、もう二度と受けることのないだろうと思われた優しさ

を送ってくれた。

「うっ……」

昨日涙が涸れるまで泣いたレクの涙腺から涙が再び溢れる。すでに誰もいなくなった村で少女の泣き声だけが静かに響いた。その口からは謝罪とその相手の名が何度も何度も、病魔に体をむしばまれ痛みで倒れるまで何度も口にしていった。そして、少女は疲れ果てて倒れた。

その様子を扉の向こう側で聞いていたオーズは静かにその場を後にした。

（まったく、みつともない）

外に出てからオーズは悪態をつき、長めで丈夫そうな木の棒を拾った。

また雨が降り出しそうな雲が昼近くになっても暗い雰囲気を漂わせている村の中、地面を引っ掻く音が静かになり始めた。ざりざり、カリカリ、ざらざら、と。

「魔法に不可能はあるか、ないか」

「がはっ」

レクの口から暖かい液体が吐き出される、それと同時に目が覚める。陽が落ちて、すっかり暗くなった村でたった一人の少女が目をあけた。ただ目を開けたというにはあまりにもうつろな瞳をしていて、白い肌はより一層白くなり生気をまるで感じられない。

（いつの間に寝て……）

真紅に染まった布団には目を向けず、黒いしみの浮かぶ木で作られている天井を仰いだ。少女は、そのまま朝に起きた出来事を思い出し、冷えているからだがより一層冷える感覚を覚える。

ああ、なんてひどいことをしたんだろう。

レクの瞳から涙が流れるということとはなかった。涙はすでに枯れてしまい、体は限界に達していつ死んでもおかしくない状況にあった。呼吸が荒い、焦点が合わない、思考がうまくできない、だ



雷が落ち、暴風雨が村を襲い始める。村全体は妖しく光り輝いていた。遙か上空でその村を見ると、光はなにか複雑な模様を描くように輝いていた。

少女は言った。たとえ声が出ていても聞こえないだろうが、そんな状況で男には何と言ったか何となくわかった。

（生きたい。私も旅をしたい。美しく、美しくない。残酷で、優しい世界を）

「……恨むなよ」

その瞬間その家は光に包まれ、そして

ゆらゆら、とんとん、ふらふら、ゆらゆら。温かい

「……」

とても病気にかかっているとは思えなかった。少女が病気にかかっ  
つてから朝起きると必ず冷たい布団が出迎え、吐き気、頭痛、眩暈  
の三拍子ならぬ四拍子が気分を悪くしていた。この男が来た前と後  
の差は何だ。少女は不思議に思っ  
て目の前にいる張本人を見た。  
高くなっている陽の光がレクの目を刺激する。

「え？」

何で目の前にいる。何でまだ生きている。レクは自分の置かれて  
いる状況を判断すべく、まだ少し雲のかかったようにもやもやした  
頭を最大限に働かせる。温かいと感じた原因は何。それは男おぶさ  
られていて、その上黒いローブが二人を包んで温風が途絶えていな  
いから。なんでこんな状況になっている。

「起きたか」

「……何で生きているの」

体を引きちぎられるような痛みはもうすでにレクからは消えうせ  
ていた。しかも体は快調だと訴えている。オーズは言った。

「魔法で治せない。けど封印はできた」

「……は？」

「封印できるかどうかわからなかったけど、やってみたらできた」

「失敗して死んだかもしれないの？」

「まあできたから、それより俺に謝れ」

オーズは最後に怒気を込めて言った。おぶられているためどんな表情をしているかレクには確認できなかった。

「化け物呼ばわりして、ごめん」

「それじゃ俺も一つ言うことがある」

「何を……？」

レクを下ろし、ロープの内に隠していた小さな弓を渡してから軽く頭を下げた。

「村の建物がすべて倒壊した」

レクに潜む病魔を封印するという魔法は前代未聞で、それをやってのけた本人でさえもう一度やれと言われてできるかどうかかわからない。そんな魔法は村全域に衝撃を与え、吹き飛ばしてしまった。

オーズとレクの周りは被害が少なかったがとても休めるような場所ではなくなった。場所を変えようと、レクをおぶって村を後にして現在に至る。

「弓は使えそうだから持ってきた」

「誕生日にお父さんがくれた狩り弓よ。宝物なの」

そうか、それは良かった。オーズは一言だけ言った。

「そうよね、謝ってほしいと思うのは筋違いよね。ありがとう」

「代償が予想以上に大きくなったのは謝る」

「私を連れて行って、そしたら許す」

オーズは道に沿って歩き始めた。脇にある大量に生い茂る木々は雲が無くなり差し込むようになった陽を受けて、一本一本がたくましく見えた。レクはそんな風景にも目を奪われつつオーズについていく。オーズは苦い表情をしながら一息ついて言った。

「俺は何人か、レクよりひどくない状況の人たちを気まぐれに助けたりしている。俺の旅に食べ物がありつけない人たちがいるとどうしても許せなくて」

レクはうなずいて相槌を打つ。

「でも村全滅は初めてでどうしたらいいか……」

一度言葉を切り、一拍置いて続きを言った。

「レクを近くの引き取ってくれそうな村に置いていくつもりなんだけど」

「一緒に連れて行つて」

「自分の身を守るので精一杯なんだ。殺されても文句は誰にも言えない旅だからそれは」

「それでも！」

一度声を荒げて、呼吸を整えて声音を強めてレクは言った。

「私にはもう夢しか残ってない」

それに、この世のじゃ他人を受け入れる村なんてない。レクはそう思った。そのことはオーズも考えていて、レクを置いていくなら懸念されるべき点だった。助けてしまった以上そのことに対する責任が発生する。風が吹き抜け、二人の髪を揺らす。

先ほどより大きなため息をする。オーズが足を止めるのに従いレクも足を止める。

「全滅したって言う町に行つて供養するか。血まみれのその服もどうにかしないと」

大きくオーズは背伸びをする。表情が明るくなり、半ば開き直つているように見える。レクはその言葉を聞いて真っ赤に染まる自分のワンピースを見て。

「そうだね、わかった」

レクはやわらかくほほ笑みだすと、歩き始める。指を町のあるほうへと指し、そのままの微笑みをオーズに向ける。風と共になびく自然の赤に染まるワンピースはとても優雅にオーズには見えた。黒いローブを翻し、先を見据えた。道ではなく想定される未来。

(いつでもレクを見捨てられる覚悟を)

魔法使いが人を助けるのに魔法を使つてしまった。レクを助ける魔法がある種の呪いであることにオーズは責任を感じていた。国に属さない魔法使いの受ける迫害はひどいものだとこのことをオーズ

は知っていた。

ただ今は前を見るしかない。

「行こうか」

T o b e c o n t i n u e d

## 二話 土の香り

通りすがりの魔法使い

二話 土の香り

「ようこそ、そしてさようなら」

刃は一筋の線となって二人へと紡がれようとしていた。輝ける剣の光は少女を魅了し、少女はその場で固まってしまった。

何かを思う暇さえなかった。ただ迫りくる刃が時間を吸い込みゆっくり迫ってくるように見えた。

しかし、刃は少女を切り裂くことはなく、横から別の白銀の刃が伸び剣を止めた。白銀の刃は踊るように剣をはじくとそのまま相手の喉を切り裂き、剣の持ち主の男が倒れた。何か言いたそうに口を動かしていた横たわる男は、やがて動かなくなった。

眼前で様々なことが一気に起き、少女の理解が間に合わない。ただ、眼の前に広がる

「見ないほうがいい」

少女に一声。黒いローブを着た男はその身につけたローブを少女にかぶせした。町に続く道を囲むように生えている木々はその様子を眺めていて、まだ完全に昇りきっていない陽は二人を照らしていた。柵で囲まれた町の入り口である門は開かれていて、閉じる気配はなかった。

そのまま立ちつくしている二人の沈黙を少女が破った。

「……殺したのね」

低く、だが落ち着いた声音だった。男は軽く頷き、少女にかぶせていたローブを再び羽織った。男の淡白な表情は何も語るうとしない。

「どうして」

その少女の声を聞いた男性は不思議そうな顔をする。男の持つ銀

髪が揺れ、揺れる瞳が少女を捉える。

「レクは切られたかったのかい」

レクと呼ばれた少女は首を横に振り、そのままうつむいた。

「そうじゃない、私を助けてくれたことは理解できる。でも、聞かすには無理ない」

「でも、奪うことをためらうようなら旅はできない。訓練を受けず旅に出ようとするとするならなおさらだよ」

レクは顔を上げる、表情は納得のいく答えをもらえなかったような苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

「……人の数だけ生き方がある。その生き方を否定していいのは自分の生き方と正反対の人だけなんだと思う」

突然話し始めた男の言葉の真意はレクには分からなかった。ただそれがこの男の考え方で生き方なのだろうと、深く言及することはしなかった。

男は右手に持っていた白銀の刀を一振りし、地面に横たわる男の命を奪った刀は何事もなかったかのように空気に溶けて消えてしまった。

「オーズ、今の刀はなに？」

当然、気にならないわけがない。

「白撃剣。 剣というのは名ばかりでその形状は刀。魔法がかかっている本人の意思で簡単に違う次元に消したり、そこから取り出したり出来る」

オーズと呼ばれた男は短く答えてくれたが、答えられた本人としては後半部分を理解できていなかった。

レクが首をかしげているのにも目もくれず、オーズは町の中を覗き込んだ。町の中には薄汚い服装をした筋肉質の男たちが家々を荒らしていた。町はすでにある疫病に襲われ滅んでしまい、病が絶えた町を賊が各々自由に空き巣をしていた。

二人はとある村からこの町にやってきて、すでにこの世からいなくなってしまう町の人々を供養するためにやってきたのだ。が、町

は滅んでしまつてからずいぶん時間がたつており、このように賊達の住処と化して中に入るのも命がけという状況になつていた。鼻を突くような酸っぱい死臭は村の中に充満している。死んでからずいぶんたつていたので、腐つていゝのだらう。

その様子を見て下せる判断は限られてくる。軽く一息ついて、オースは言う。

「供養どころじゃない。悪いけど諦めて別の町に」

「追いつ返そう」

町から離れようとするオースの意思を否定するようにレクは言い放つた。その言葉にオースは呆れるしかなかった。

「レクは死にたいのか？ わざわざ危険な目に会う必要はない。

ヒトをいちいち殺したくもないし二人で追いつ返そうなんて無理な話だ」

そう言い残すと町から離れるように歩いて行つた。その場にレクだけが残され、自分の手にある弓を握りしめ、無謀にも死した町へと足を踏み入れた。策もなく町へ踏み入れたわけではないが、万人に問えば万人から同じ答えが返つてくるだらう。その行動は、無謀だと。

しかしレクはオースに簡単に却下され、憤りを感じてしまった。それは単なる意地でしかなかった。

「……追いつ返すだけなら、きつとできる」

レクは思つた。命をわざわざ捨てに行くような行動をとろうとするレクを止める者は、少なくともその場にはいなかった。病み上がりのか弱い少女に何ができよう。風がかすかに流れ、肩まである茶髪を揺らしながら血の匂いと共に町の中へと向かつて行つた。

足音を立てないよう慎重に町の中へと進む。家の影を歩き、ヒトの死角を見つけては歩き、ヒトが遠くに行つたのを確認しては歩く。砂や砂利が細かい音を立ててレクのすぐ横を通り過ぎる。

しばらく歩いてみると、賊達は死んでしまつた町の人々を惜しげも

なく踏みつけ、気にすることもなく空き巣を繰り返している様子を見ることになった。横たわる人々は抵抗することはできず。陽の光を浴びて腐るのを待つしかなかった。日はいつの間にか高く昇り、レクの眼前に広がったのは横たわる人と殺伐とした空気さえなければいつもの町の風景だった。腐った肉からは白いものがはみ出て見え、レクは思わず目を逸らしてしまった。レクは思う。あの時オーズが来てくれなければ今頃あのように私もなっていたんだろうな、と。

(ひどい……)

ただ一言そう思った。

村を助けてくれようとした町の人々をどうにかして供養してあげたい。それだけの想いだった。今のレクには命をかけるだけの大きな理由だった。

それを後悔することになるのは遠くなかった。

同時刻、オーズと呼ばれていた男が後ろに誰も付いてきていないことによく気づいた。

「ん？ ……まさか……はあ」

レクがついてきていないことに気づいたオーズはため息をついた。道端に生えている木々はやはりそれを眺めているだけだった。

町の中央部。閑散とした広場の中央にある井戸に、人間ではない何かか腰をかけていた。

「……」

彼は感じていた。仲間ではない誰かがこの町をうろついていることに。

「人間……」

彼は気付いていた。外部から何者かが二人侵入したことに。

「おい、お前」

彼は近場にいた道具に知らせを出した。今近場に侵入した一人がいると。彼の鼻をかすかな風が撫で、血の感触が鼻の奥深くまで伝わる。

彼は人間の血を感じた。この町のどこかに連れの道具を殺した奴がいる。

「きつと、大将を押さえればかえつてくれるよね……？」

ならば、まず大将を見つけないと。

レクがそう決めてからの行動は早かった。弓でどう戦えばいいか、どう捕えればいいかを考えた。町中を徘徊する山賊に見つからないように音を立てずに町の奥にまで歩みを進める。ヒトを相手に戦うのは初めてのことで、恐怖心を抱いていたレクだったがそれはあまり気にならなかった。気にはなっていないものの、土を踏む足がなかなか土から離れてくれない。何か重しが乗っているような感覚が全身を覆い、汗と緊張が神経を狂わせ、鼓動を高鳴らせている。

「なんでだろう」

時折吹く風は汗を気化させレクの体温を奪う。そのたびひんやりとした感触が何者かにばれているのではないか、という寒気と勘違いするほどにレクの頭は混乱をしていた。狭く目立たない道を選びながら己の感を頼りにレクは重い足取りで町の中央部へと向かう。

そんなレクに疑問が浮かび始めた。あまりにも人に出会わなすぎないかと。ただ、その疑問は無意味だった。

病魔による死の苦しみがレクの感覚をおかしくしていたことにレクは気付かない。鼻を突くような鉄の臭いが自分から染み出ていることにレクは気付かない。病気にかかる前なら判断できる。これがとても無謀なことだということにレクはその時まで気づかなかつた。「いるな、そこに」

町の中央部に差し掛かった時だった。その一声でレクが存在が公に

なり、鋭い恐怖がたちまち体と心を支配した。レクが唯一動かせるのは眼だけで、いくら本能が危険だと叫んでも体がまるで反応しない。陽が当たっているうえに、寒くもないがレクの体は自然と震え、涙が涙腺を通る。レクは何かをしなくてはと思う一心で固まった首の筋肉を無理やり動かし、その目で声の持ち主を確認する。

声を出したのは町の奥にいた山賊のリーダーのような人物。硬そうな黒い髪を生やした男。耳の作りが人間のものとは違い、尾てい骨のあたりから尻尾が生えている。黒く硬そうな毛が生えている尻尾はだらりと垂れていた。そこを除けば全く人間と大差がなかった。

（獣人……！）

人間。獣人。龍人。妖精。様々にも多くの言葉を使う種族が存在する。そのうちの一つである獣人は人より嗅覚や視覚と言った五感が高い。彼が賊のリーダーであるようだ。レクは気付いていないが、すでにレクは大きな影に覆われている。それらが意味するのは

「血の匂いがするぞ」

そう言った獣人の男はレクのいる方向を鋭い瞳で睨みつける。それと同時に背後から鈍い衝撃がレクを襲い、レクは意識と弓を同時に手放す。場が暗転し、痛みを感じる暇などなかった。

こん棒で少女を殴りつけた道具は気絶してしまった少女を背負い、獣人の男に向かってきた。騒ぎを聞きつけた者たちが、家と家との間他の場所より広いこの場所に数人集まってきた。

「女だ。と言ってもまだ餓鬼だ」

「町の生き残りか？」

「弓を持っていたから、復讐ってところかね」

「餓鬼が健気だねえ」

「どうするんだ。これくらいだと、売るにも遊ぶのにも使えねえな」

その問いは獣人の男に向けられた。獣人の男は立ち上がり、少女に近づく。完全に気を失っているようで、決して虚を突く構えをしていないわけではなかった。

こいつは多分、殺していない

血の匂いが染みついているものの、この程度のやつらに捕まる程度で男一人を殺せるわけがない。獣人は道具を殺した奴はまだ別にいると判断した。その判断を下すと急にその少女への興味がなくなってしまった。

少女を一度見て、一瞥するとその場にいる男たちに向けてとこう言い放つ。

「どこか屋内に連れて行け。 そのあとは好きにしてい」

どこか無粋な笑みを男たちは浮かべ少女を担いだ集団はどこかへと移動をし始める。各自得物を担いで……。

獣人はとても無表情だった。少女に興味はなく、同時に周りを飛び回る道具どもにも興味はなかった。虫である彼らは獣人である彼にとってでは便利な道具だった。何をすることも自分の代わりにやってくれる。ただそれだけでは満たされない。目的のない殺人や戦いに嫌気がさす。

「……」

大きく鼻から空気を取り込むと、そのまま鼻から空気を出した。

待っていたのはこんな餓鬼ではなく、殺してくれる者だったというのに。

淋しげな表情を浮かべると、再び腰を下ろそうと井戸に近づく。

「！」

すぐ近くにいた慣れない気配がすることに気づく。一気に危機感が本能を揺さぶり、瞬時に体を動かせる体勢を取り戦闘に備える。体中の毛が逆立ち、垂れていた尻尾が跳ね上がる。誰もいなくなった広場に、砂利の擦れる音と風の起こす弱々しい音がはっきりと聞こえるほどに彼の感覚は研ぎ澄まされていき、やがて気配の元を見つけた。汗が一筋頬を掠める。

黒いローブを纏った男は獣人と目を合わせる。男は小さな小屋の屋根の上にいる。男が発する違和感の塊のようなオーラは獣人をより警戒させた。

「手馴れたな、俺を殺しに来た賞金稼ぎか」

冷や汗を流しながら言った。彼の獣の本能がこう叫ぶ。こいつは強いと。口が渴き、鼓動がゆっくりと大きな音を刻む。

そんな緊迫感に苛まれている自分の力量を見切ってか否か、突然男は違和感を感じさせるオーラを発しなくなった。

「いや、少女の連れだよ」

何一つ慌てることなくゆっくりとした口調で獣人に話しかけ、男は屋根の上から飛び降りた。着地した地点から砂埃が巻きあがり、その砂が獣人の頬を刺激する。

「俺はあいつを助ける。お前の仲間が多分死ぬことになる」

「構わん。弱い人間が何人死のうと俺には関係がない。それよ  
り」

一度獣人は言葉を切り鋭い眼光を男に向ける。これから発する言葉はもしかしたら自殺行為なのかもしれない。しかし、それでこそ彼には意味があった。ここを死地とする覚悟を決め、落ち着いた口調で言った。

「強い人間。興味がある」

それを聞いて、一つ笑みを浮かべて興味なさそうな顔をして男は言う。

「俺は命が惜しいからな、パスだ」

「そんなことで逃れられると思うか」

一拍置いて、オーズは変わらぬ表情で言った。

「思わないのか」

「……」

二の句が継げない。多分この人間は闘ってくれないだろう。簡単にも決意を覆されてしまい、拍子抜けしてしまった。無理やり戦いを挑んでも本気で戦ってくれなければ意味がない。

「俺はドウナサだ、人間」

名乗るといふ行為は、久しぶりだった。次会うときは必ず。

「……オーズだ。ドウナサ、俺は賊なんて向いてないと思うぞ」  
一言述べると黒いローブを一度手で広げると走りやすい体制になり、そのまま後ろを振り向くことなくオーズは少女の後を追い走り去った。その姿をドウナサはしばらく眺めていた。

（賊が向いてないだと、そんなこと己が一番理解している）  
その場に一人残ったドウナサと名乗った獣人はただ笑みを浮かべ、その場に座り込んだ。その時になって一気に疲労感が襲いかかってきて、軽い眠気を生んだ。しかしすぐにその眠気は吹き飛び、一つの思考だけがドウナサを魅了していた。

オーズ、もしあの男が俺と戦いになったらどのような手段で戦ってくるのだろうか？

自らの体を武器に肉弾戦で来るか。なら俺に対して打撃の効き目は薄いことは相手も知っているはず。ならどのような手段で俺を殺すにかかると？

ローブの内側には暗器（ここでは体に隠し持てる武器のことを指す）が仕込んであるかもしれない。肉弾戦と思わせて隙をついて俺を一撃で仕留めるか？

暗器ではなくローブの内側に剣、槍の刃のついた類の武器や銃器を隠しているかもしれないという可能性も否定できない。

そして、魔法使いであるならば俺は対抗できるか。

幾通りもの戦闘を頭の中で展開する。どうすれば勝てるかをこと細かく考える。それだけでドウナサは興奮し、血が煮えたぎった。やはり、強者との出会いはいい。

「賊は性に合わないな、やめて賞金稼ぎにでもなってみるか」  
死地を探す方法はいくらでもある。

「……………」  
手を鎖で止められ、ぶら下げられていることに気づく。周りには

気持ち悪い笑みを浮かべる男の群れ。手には様々な武器が握られている。切り裂くのではなく、叩きつけるための。

(まったく、何をやっているんだろう)

助けてもらっておいて、あっさり死ぬことになるなんて。

小屋の中の土の臭いがレクの鼻を刺激する。恐ろしい出来事を目の前に体が自然と震えあがる。

レクはこの時によく気付く。狂い始めた常識が正常に戻り始める。自分はとても弱くとても惨めでとても意味がない。病気に心をやられすぎていたため救われた瞬間に、自分がとても大きな存在のように感じていた。

脇腹に強い痛みが走る。体におかしな音が鳴り響いたかと思うと腕がおかしな方向に曲がる打撃が入る。男たちの下品な笑いが耳に入る。

痛みは叫びに変わり、目から涙がこぼれた。病気ではなくヒトに殺されようとしている。下品な笑いとともに何度もレクの体に鈍器が叩きつけられ、レクが叫び声を上げるたびに下品な笑い声がより大きくなる。顔を少し上げて男たちの様子を確認すると、なんとも楽しそうな顔を仲間達と話し合っている。レクは男達の話題でしかなかった。

なんて見苦しい世界だろう。生きるためでもなく食べるためでもなくただ欲を満たしたいために殺す。なんて美しい世界だろう。私の考えは矛盾しているだろうか。自分が今まさに殺されようとしているのに私はどうしてこんなにも世界が愛おしく輝いて見えるのだろうか。

痛みや叫びは止まらない。思考はだんだん止まっていく。これが死。そして、レクの活動止まった。男達はそれでも殴ることをやめない。レクの活動が停止するということもまた一つの話題で、場を盛り上げるための状況変化でしかなかった。

ただ、それゆえもう一つの状況の変化についていけなかった。

「こんにちは」

レクを殴りつけている男たちに一声かける。

「責様どこから」

次の句を告げる前に喉に空気が通らなくなり、そのまま倒れて絶命した。反応の鈍いものは突然現れた黒い影に戸惑い、躍るような白い刃に首を裂かれすぐに絶命した。素早く反応したものは鈍器を構え黒い影へと殺到する。しかし、黒い影は男達の隙間を縫うように全てを避けると小屋の出口に立ちふさがり逃げ場を封じた。黒い影が黒いローブを着た男だということを確認した数人の男は、次の行動をする前に喉を裂かれもがき苦しんだのち絶命。強さというものを見せつけられ恐怖した残りの男は後ずさりをし、小屋の窓から外へ脱出しようとする。背中を見せつということが一番の好きだということに彼らは気付かず、黒いローブの男は追いうちをかけるように背中から切りつけ、次に痛みを苦しんでいる数人の男達の首を同じように切り裂いた。

下品な笑いで満たされていた小屋は一瞬のうちに静かになり、二人だけになってしまった。

小さな家畜小屋にぶら下げられているレクを見つける。打撲の跡や腕の関節の数が既に人のものではない。

顔が醜く変形しているがかるうじてレクだと判断できる。馬鹿だなと小声で言うと、いろいろ呟いてレクの体に手を向ける。淡い光を放ったのと同時に、レクの体が癒えていくのがわかる。増えた関節は次第に少なく、打撲の跡はだんだん消えていき顔の様子までもゆつくり元戻っていく。

「……オーズ……？」

レクが声を出す。

「生きているな」

「……まって、どうして、生きているの？ おかしいよ、あんなに

酷いことされて」

そう問われたオーズは目を閉じてうつむく、しばらく間を開けてオーズは答える。

「……レクを助けた魔法、実はあれは呪いの一種なんだ」

「呪い……？」

「ここを出たら説明するよ」

治療を終えたオーズはレクと小屋をつなぐ鎖を白撃剣で断ち切る。パキンと甲高い音とともに鎖は重力に従い地面に落ちる。切れ目はとても綺麗で、切った刀は一切刃こぼれをしていない。

オーズはレクの手を引つ張り山賊たちがいるところから遠く離れた別の家畜小屋に入る。今いる箇所はどうやら主に家畜を育てる場所らしい。

「助けてくれてありがとう」

オーズはため息をついて村に入る前に言ったことを言った。

「レクは死にたいのか」

殺気を放ちレクを見据える。怒っているのがすぐにわかり、今すぐにも首を同じように切り裂かれるのではないかと錯覚した。

「死にたく、ない……あの、ごめん、なさい」

「もう勝手なことするな。次は助けない」

旅をしているヒトが危険に首を突っ込む真似をしてはいけない。

この事実を確認するのに実体験をできるものは多くないだろう。死ぬ寸前まで追い詰められ、このことをレクほど理解した者はおそらくなかなかないだろう。

「わかればいいよ、それに本当に死を覚悟していたなら謝らないといけないことがあるしね」

オーズは死んでしまった家畜たちを囲む策の上に腰をおろした。

「呪いについての話をしよう。レクを救った魔法は一種の呪いなんだ」

オーズは何の脈絡もなく穏やかな笑みをレクに向けて話し始めた。いきなり割れた鏡の破片を持つとそれをレクの首元に近づける。鏡

に小さく黒い刺青のようなものが映る。三つの輪が横一列に重ならないように並んでいる。

「これが呪いの印<sup>いん</sup>」

呪いとは、本人に印を刻むことでその肉体に影響を及ぼす魔法の一つ。オーズがレクに施した呪いとは。世界には様々な力が満ち溢れている。人々の持つ生命エネルギー。世界中を流れる自然エネルギー。これらをとある技術で変換し、行使するのが魔法。それを行うことができる特殊な才能の持ち主を一般に魔法使いと呼ばれる。レクにかけた呪いは生命エネルギーを呪いの力で強制的に才能のない者の体を働かせ、魔法を行使するエネルギーに変換し、その力で病魔を封じ込めるもの。その副作用として表れるのが強靱な生への執着。意識的なものではなく体が生にすぎるとする無意識的なもの。魔法を行使するエネルギーも元は生命エネルギー。呪いのもつたエネルギーは病魔を封じ込めるだけでなく死に至るダメージを受けても呪いさえ活動していれば生き永らえてしまう。手足を切断させようと、体は生きる。印に触れないように首を切断すれば脳は死んでも臓器は生きる。血を抜いても印さえあれば体は腐ら生きる。病魔を封じるといふ一見メリットしかなさそうに見える呪いは、苦しみが長引く呪いでもあるということ。

「もうひとつは生命エネルギーの無理な変換で寿命が短くなる」

「それが私にかかっている呪い」

レクは恐怖した。弱いレクが囚われれば、体がどんなに弄ばれようと死ぬことはできない。屈辱から逃れる方法がないのだ。それは同時にそうならないために強くなりたいたいという思いも生まれた。旅をやめよという思いは不思議と生まれなかった。

「副作用は俺の責任だ。俺と一緒に旅している間は、助けられるときには助ける」

その言葉は同時に見捨てるときになっただら見捨てると言っていることになる。

「ごめんなさい。もうこんな無茶しない」

「よし」

そう言って家畜小屋の扉を開ける。町から出て次の町に行くために。オーズは振り向き笑顔でレクの手を取ろうと手を伸ばす。殺気を放っていたとは思えないほどの笑顔で。

「行こう」

町の裏口までまっすぐ進み、山賊に遭遇することなく町を出ることができた。町を出ると永遠と森の道が続いており、すぐそばにある看板を見るとその道を進むと町へ着くと書いてあった。

「ねえオーズ」

オーズは返事をしない。

「殺すことに抵抗はないの？」

「生きるためには仕方がないよ」

「そう……でも私は何度考えても、それは悪いことだと思うの。自分が傷めつけられ、死に追い詰められていたことを思い返す。どんな人にもそういう思いは必ずあるはず。死にたくないよ。」

「そうか」

オーズは感情を込めず返事をする。

「でも、私はそれを正しいことだと思う」

「……」

「オーズ。私も殺せるくらいになりたい」

「……弓なくなっちゃったな、何か武器でも持つ？」

森の中を二人はゆく。

T o b e c o n t i n u e d

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4050g/>

---

通りすがりの魔法使い

2010年10月22日00時42分発行